

令和 6 年度  
入学者選抜学力試験問題

後期日程

国 語

注 意

1. 解答は別冊の解答用紙の所定の解答欄に書くこと。
2. 解答用紙の表紙を含むすべてのページの※印欄に、受験番号・氏名を記入すること。

受験番号は、本学受験票の受験番号を記入すること。

※印欄以外の箇所には、受験番号・氏名を絶対に書かないこと。

3. 試験終了後、この問題冊子は持ち帰ること。
4. 総ページ数

問題冊子—11 ページ

(うち白紙—1 ページ)

## 問題訂正

令和6年度入学者選抜学力試験 後期日程「国語」

(受験対象者:文学部志願者)

訂正箇所：6 ページ 12 行目（「問二」④の出題箇所）	
正	誤
嬌 <sup>④</sup> 声	矯 <sup>④</sup> 声

※ 合否判定前に判明したため、本設問については受験者全員を正解として再採点の上、合否を判定しました。

I つぎの文章について後の問に答えよ。

〔私〕（春野）と妹の「澄香」の二人姉妹は、重い病気の療養中である父親と三人で暮らしている。次の場面は「私」と「父」が窓辺に座って庭を眺めているところである。（

庭の土は、

匂いで溢あふれている。父が、眉アをひそめ  
手アでさす  
る。

「少し、違和感がね」と、  
の辺りが、シンドウAしているように見える。

壊してゆくのだった。

「大丈夫？」父に聞くと、  
の下で、稚魚①が跳ねたように見えた。

動きだろうか。凝らすと、それは再び  
喉元②が  
動きが消えた。  
が聞こえてきた。

(i) 「みんなのふつうより、大事なのは君のふつう」

B  
ダンゼン大事で、

X  
「なかなか、いいかも」と考えずに返答する。

みんなの中にと不安になる。<sup>1</sup> みんなのふ

つうって、

の文句みたいだ。

(ii) 「家に帰る前にこの懸垂幕見たら、なんだか後押しされる気がするの」

X  
「なかなか、いいかも」と考えずに返事する。

著作権保護のため本文掲載を省略し、出題箇所のみとします。

澄香は仕事や同僚について、

を行い、文化センター<sup>③</sup>で催事があるときは

一番好きな作業だった。

拾うことが多くて、エンセキ<sup>c</sup>は常に壁寄りを好み、

著作権保護のため本文掲載を省略し、出題箇所の明示のみとします。

見えてくるのだった。

納得できなくなり、<sup>ウ</sup>私は

、年末の全社員で行うシンボクカイの

んは、澄香と私を楽にしてくれる。

家の

声<sup>④</sup>がして、矯声<sup>④</sup>と足音が重なる。

ゆくように感じる。

だから父のさもありな<sup>2</sup>

(野々井透「棕櫚を燃やす」による)

問一 傍線部A～Dのカタカナを漢字に改めよ。

問二 傍線部①～④の漢字をひらがなに改めよ。

問三 傍線部ア～ウについて、どういふことか、比喩を読み解きつつ、わかりやすく説明せよ。

問四 二重傍線部(i)(ii)について、「みんなのふつうより、大事なのは君のふつう」という言葉に、「澄香」は「なんだか後押しされる気がする」といつているが、それはどのようなことか、詳しく説明せよ。

問五 波線部X・Yについて、「私」が「考えずに返答」、「考えずに返事」するのはどうしてか、説明せよ。

問六 傍線部1について、  
(a) 「みんなのふつうって、自分のふつうの一番外側を薄っぺらく剥ぎ取ってくっつけ合わせたよう」とはどういうことか、わかりやすく説明せよ。

(b) 「脆いのを知っているのに、その球体の中の方が安楽だと思ってしまう危険な装置」とあるが、なぜ「安楽」だと思えるのか、説明せよ。

問七 傍線部2 「父のさもありなんは、澄香と私を楽にしてくれる」とあるが、

(a) 「父のさもありなん」とは、父のどのような考え方のことをいうのか、説明せよ。

(b) 「澄香と私を楽にしてくれる」とあるが、なぜ「澄香と私」は「楽」になるのか、説明せよ。

II つぎの文章は、聖徳太子の超人的な能力について語つたものである。これについて後の間に答えよ。

太子、小野妹子を使ひとして、前の身にもろこしの衡山かちさんにありて、たもてりし法華経を、取りにつかはす。教へてのたまはく「赤鼻の南に衡山あり。山のうちに般若寺あり。我が昔の同法はみな過ぎ死にけん。ただ三人あらん。我が使ひと名のりて、そこに住みしときにたもてりし法華経の、あはせて一卷にせる、あらん、請ひてもて来たれ」とのたまふ。妹子渡り行き、教へに従ひて至りぬ。門に一人の沙門ありて、見てすなはち入りて「思禪法師の使ひ来たれり」と告ぐなれば、老いたる三人、杖をつきて出づ。喜び笑みて、使ひに教へて経を取らしめつ。すなはちもて来たれり。

太子、斑鳩いかるがの宮の寢殿のかたはらに屋を作りて夢殿と名付く。一月に三度、夢を見て、明くる朝に出でて、閻浮提えむぶだいのことを語る。また、この内に入りて、諸々の経の疏を作りたまふ。ある度は七日七夜、出でたまはで、戸を閉ぢて、音もしたまはず。高麗の惠慈法師の曰はく「太子、三昧定に入りたまへり。おどろかし奉らざれ」と。八日といふ日、出でたまへり。玉の机の上に一卷の経あり。惠慈法師を召して語りてのたまはく「我、前の身に衡山にありしときに、たもてりし眞の経はこれなり。去にし年、妹子がもて来たりしは、我が弟子の経なり。三人老いたる僧の、我が納めしところを知らずして、異経をおくりしかば、我が魂を遣りて取らせつるなり」とのたまふ。見合はするに、かれには無き字一つあり。この度の経も一卷に書けり。黄なる紙にて玉の軸あり。

また、百済国より僧道欣だうこんら十人來たりてつかまつる。「前の世に衡山にして法華経を説きたまひし時、我らは廬岳ろがくの道士として、時々まうでて聞きし人々なり」と申す。

後の年、小野妹子、また、もろこしに渡れり。衡山に行きたれば、さきの僧一人残り。語らひて曰はく「去年の秋、汝が国の太子、もとは思禪師、青龍の黒馬に乗りて、五百の人を従へて、東方より空を踏みて来たりて、古き室に入りて探りて、一卷の経を取りて、雲を凌ぎて去りにき」といふ。明らかに知りぬ、かの夢殿に入りたまへりしほどのことなりけり。

太子の御妃、膳の氏、かたはらにさぶらふ。太子、語らひたまふ、「君、我が心のごとし。一つのこと違はず、幸ひなり。」

われ死なむ日は、穴を同じくして共に埋むべし」と。妃、答へて申す、「千々の秋、万の歳、朝夕に仕うまつらんとこそ思へ、何心ありてか、今日は終はりのことをばのたまふ」と。太子、答へたまふ、「始めあるは終はりあり。ものの定まれる理なり。ひとたびは生まれ、ひとたびは死ぬる、人の常の道なり。我、昔、あまたの身を変へて、仏の道を行ひ勤めて、わづかに小国の太子として、妙なる議を流布しつ。議無きところに一乗の教へを説きつ。五濁の悪しき世に久しくは遊ばんと思はず」とのたまふ。妃、涙を垂れてうけたまはる。

〔三宝絵〕による

(注) ○衡山——中国湖南省にある山。 ○赤崁——中国。 ○同法——修行の仲間。 ○沙門——僧侶。

○思禅法師——太子の前世における名。 ○閻浮提のこと——広い現実世界の事象。 ○疏——注釈。

○三昧定——心を一つに集中させた状態。 ○盧岳の道士——盧山の修行者。 ○時々——いつも。 ○青龍——四神の一つ。

○妙なる議——優れた仏の教え。 ○一乗の教へ——仏の、唯一にして真実の教え。 ○五濁——五種のけがれ。

問一 傍線部 A・B を現代語訳せよ。

問二 傍線部 1 を言葉を補って、わかりやすく解釈せよ。

問三 二重傍線部 X の「なれ」、二重傍線部 Y の「なり」の意味の違いを簡潔に説明せよ。

問四 傍線部 2 「かれ」が指すものを明らかにして、わかりやすく解釈せよ。

問五 傍線部 3 「明らかに知りぬ」とあるが、妹子はどういうことを知ったのか、詳しく説明せよ。

問六 傍線部 4 を現代語訳せよ。

問七 傍線部 5 について、

(a) どういうことを言っているのか、わかりやすく説明せよ。

(b) なぜ「久しくは遊ばんと思はず」と考えたのか、本文全体の内容に即して詳しく説明せよ。

III

つぎの文章について後の間に答えよ。ただし、設問の関係で返り点・送りがなを省いた箇所がある。

漢陰老父者、不<sup>ル</sup>知<sup>ラ</sup>何<sup>A</sup>許<sup>ノ</sup>人<sup>カ</sup>也。桓帝延熹中幸<sup>シ</sup>竟陵<sup>ニ</sup>、過<sup>キ</sup>雲夢<sup>ヲ</sup>、臨<sup>ム</sup>沔水<sup>ニ</sup>。百姓<sup>1</sup>莫<sup>レ</sup>不<sup>レ</sup>觀<sup>ル</sup>者、有<sup>リ</sup>老父<sup>ニ</sup>独<sup>リ</sup>耕<sup>シ</sup>不<sup>レ</sup>輟<sup>ヤ</sup>。尚書郎南陽張温異<sup>ト</sup>之<sup>ヲ</sup>、使<sup>メ</sup>問<sup>ハ</sup>曰<sup>ハク</sup>、「人皆來<sup>リ</sup>觀<sup>ル</sup>、老父独<sup>リ</sup>不<sup>レ</sup>輟<sup>メ</sup>、何<sup>2</sup>也。」老父笑<sup>ヒ</sup>而<sup>レ</sup>不<sup>レ</sup>對<sup>ス</sup>。温下<sup>ル</sup>道<sup>ヲ</sup>百步<sup>シ</sup>、自<sup>ラ</sup>与<sup>フ</sup>言<sup>フ</sup>。老父曰<sup>ハク</sup>、「我野人<sup>C</sup>耳、不<sup>レ</sup>達<sup>セ</sup>斯<sup>D</sup>語<sup>ニ</sup>。請問<sup>ス</sup>、天下乱<sup>レ</sup>而立<sup>ツ</sup>天子<sup>ヲ</sup>邪、理<sup>をさマリテ</sup>而立<sup>ツ</sup>天子<sup>ヲ</sup>邪。立<sup>テ</sup>天子<sup>ヲ</sup>以<sup>テ</sup>父<sup>ニ</sup>、天下邪、役<sup>シ</sup>天下<sup>ヲ</sup>以<sup>テ</sup>奉<sup>ゼ</sup>天子<sup>ニ</sup>邪。」昔聖王宰<sup>をさメシトキ</sup>世<sup>ヲ</sup>、茅茨采椽<sup>ぼうしさいてんニシテ</sup>、而万人以<sup>テ</sup>寧<sup>ヤサシク</sup>。今子之君、勞<sup>シ</sup>人自<sup>ラ</sup>縱<sup>ラ</sup>、逸遊無<sup>シ</sup>忌<sup>ム</sup>、吾為<sup>レ</sup>子羞<sup>ツ</sup>之<sup>ヲ</sup>。子何忍<sup>ビ</sup>欲<sup>ス</sup>人觀<sup>ル</sup>之<sup>ヲ</sup>乎。」温大<sup>イ</sup>慚<sup>ハ</sup>、問<sup>フ</sup>其姓名<sup>ヲ</sup>、不<sup>レ</sup>告<sup>ゲ</sup>而去<sup>ル</sup>。

〔後漢書〕逸民伝による

(注) ○桓帝——後漢の第十一代皇帝。 ○延熹——後漢の年号。一五八～一六七年。 ○竟陵——今の湖北省の地名。

○雲夢——雲夢沢。古代より帝王の狩猟・遊覧の地。 ○河水——漢江の古名。 ○百姓——民。

○尚書郎南陽張温——尚書郎の官に在った南陽出身の張温。 ○宰世——世を治めること。

○茅茨採椽——「茅茨剪らず、採椽削らず」の略。古代の伝説上の帝王である堯の宮殿が質素であったことのため。

問一 二重傍線部A、Dの文中での読みを、ひらがなのみを用いて示せ。

問二 傍線部1について、

(a) ひらがなのみを用いて書き下せ。

(b) 言葉を補って現代語訳せよ。

問三 傍線部2について、張温は何を聞こうとしたのか、説明せよ。

問四 傍線部3について、ここでは誰のどのような行いを指すと考えられるか、具体的に説明せよ。

問五 傍線部4について、言葉を補って現代語訳せよ。

問六 傍線部5について、張温が「大慚」したのはどんなことを悟ったからか、説明せよ。

## 出典

科目	大問 番号	著者名	作品名	出版社名	掲載ページ	出版年度
後期日程 国語	I	野々井 透	棕櫚を燃やす	『太宰治賞 2022』筑摩書房	32-36	2022
	II	源 為憲	三宝絵(東博蔵本)	無し	無し	無し
	III	范曄	『後漢書』逸民伝	無し	無し	無し